

中世末期都市バーゼルにおける画家—ツンフト史料の再検討—

沖澄弘（京都大学）

現在スイス連邦に属する都市バーゼルは、ライン川上流域に位置し、アルプス南北の交通の要衝として中世以来、現在に至るまで栄える。バーゼル公会議期（1431-1449）に活動が確認されるコンラート・ヴィッツ（1400年頃-1445年頃）を皮切りに、多くの画家がこの地に工房を構えてきた。15世紀後半、印刷業の黎明期には、マルティン・ショーンガウアー（ca. 1445/50-1491）の兄イェルク（1514年以前に死去）の活動が確認され、遍歴時代のアルブレヒト・デューラー（1471-1528）も彼の地に数年滞在したことが確からしい。また、英国での活動時期に近年の研究が著しく偏るハンス・ホルバイン（子）（1497/98-1543）であるが、彼もまた、兄アンブローシウスに続いてバーゼルにて親方として工房を構え、1526年の渡英後も、晩年に至るまでバーゼルとの縁由を保持した。

ここで一点注目されるべきは、彼らはすべて、バーゼル外の出身であったという事実である。ライン上流の一都市であったバーゼルが、いかにこれらの、いわゆるドイツ・ルネサンスを代表する才能を引きつけえたのであろうか。本発表は、上記の問題意識を念頭に、画家、ガラス工、鎧工が所属した都市バーゼルのツム・ヒンメル同職組合（Zunft zum Himmel）に関する文書記録をたどり、史料的な視座から、当地における画家の活動実態に関するいくつかの新たな基礎情報を提供する。先行研究は市参事会で特別な位置を占めた4つの特権的組合に集中し、弱小組合であったツム・ヒンメルの中世末期における活動実態に関する先行研究は、いずれも概観的なものに止まる。そのため、未刊行の史料も多く残り、研究の余地は未だおおきいと言える。

本発表では、まず初めに、1361年に書かれた、唯一の現存する加入条件に関する文書（Meyer et al. 2010; Tacke et al. 2018）をもとに、15世紀半ば以降におけるツンフト加入条件の復元をこころみる。バーゼル市文書館に現存する年度毎の加入名簿（Zunftarchiv Himmel 3, Rotes Buch der Zunft Zum Himmel）を仔細に検討し、異邦人、部外者、縁故、助手らのカテゴリ区分、および加入条件を明らかにする。次に、ここで得た知見を元に、ヒンメル組合所属の親方画家は助手をもたない者も含め小規模な工房運営を基本とし、大規模な注文の際にはしばしば協働体制を組んでいた事実を明らかにする。続いて、コンラート・ヴィッツに関連する史料に着目し、この画家が組合加入直後から、経済的にも規格外の大規模工房運営を行っていた点を明らかにする。ここで得られた知見から、ヴィッツの遍歴および公会議下バーゼルにおけるツンフト加入経緯を考察し、都市バーゼルにおける画家の流入に関するケーススタディとしたい。